

令和8年度議会広報広聴委員会行政視察研修報告書

- 1 目的 所管事務調査先進地視察（行政視察）
- 2 実施日 令和8年5月27日（水）～28日（木）
- 3 視察地 埼玉県三芳町 株式会社 会議録センター（埼玉県鴻巣市）
- 4 視察内容 埼玉県三芳町 『「広報みよし」と「議会のライブ配信」について』
株式会社 会議録センター 『「議会だより」研修』
- 5 参加者 委員長 加藤 誠一
副委員長 大河原 千晶
委員 落合 千枝子
委員 福田 克之
委員 加藤 朋子
委員 永井 孝叔
委員 若見 孝信
委員 石岡 祐二
委員 角田 憲治
事務局職員 1名

埼玉県三芳町 『「広報みよし」と「議会のライブ配信」について』

視察日 令和8年5月27日（水）

1 三芳町の概要

県の南部に位置。東武東上線を利用できるベッドタウンだが、工場等も立地。ホウレン草などの野菜栽培が多い。

人口 37,453人 面積 15.33km²

議員定数 15人

2 視察内容

三芳町において発行されている「広報みよし」は令和7年度「全国広報コンクール」広報紙部門（町村部）において、全国入選をしており、高い評価を受けている。また、議会においては、議会のライブ配信を YouTube（ユーチューブ）サービス

を活用して実施しており、住民への積極的な情報公開や開かれた議会運営を行っている。

当市においても、市民への分かりやすい情報発信の充実及び議会の透明性向上を目的として、議会だよりの質的向上や、議会中継のオンライン配信導入を検討している。そのため、三芳町の先進的な取り組みについて調査し、今後の活動実施の参考とする。

3 所感

まず驚かされたのは、配布されたスライド資料そのものであった。多くの自治体の資料が文字を詰め込んだものである中、三芳町の資料は一枚ごとの文字が少なく、情報が視覚的にどう伝わるかが資料自体で実演されていた。しかもそれを業者ではなく担当職員が作成しており、実際広報誌自体の作成も、一切業者が関わっていない完全自作の広報誌である（印刷は除く）。そこにも、同町の広報力の蓄積を実感した。

広報改革の原点は、ゴミ捨て場に山積みされた広報誌を職員が目にしたことだという。「配った」と「届いた」は違う。「読まれない広報紙は税金の無駄」という言葉は、作り手自身の覚悟とプロ意識の表れである。「一生懸命作ったから読んでほしい」ではなく「どうすれば読んでもらえるか」を徹底する読者目線こそ、最も学ぶべき姿勢だと感じた。

この姿勢は議会だよりにおいて、より切実である。議会だよりは「見なくても損はしない」媒体だからこそ、読みたくなる工夫が欠かせない。原稿も写真も議員自らが担うさくら市議会だよりにては、「結論から書く」、「要点を絞る」、「紙面サイズを意識して撮影する」といった技術を明日からの編集に直接活かせるほか、デザイン業者へ意図を言語化して伝える力にもつながる。

最も重要な学びは、三芳町が広報の目的を「読まれること」のさらに先、読んだ人の「行動変容」に置いていることである。お知らせ欄も特集記事も「読んだ人にどう動いてほしいか」から設計されていた。

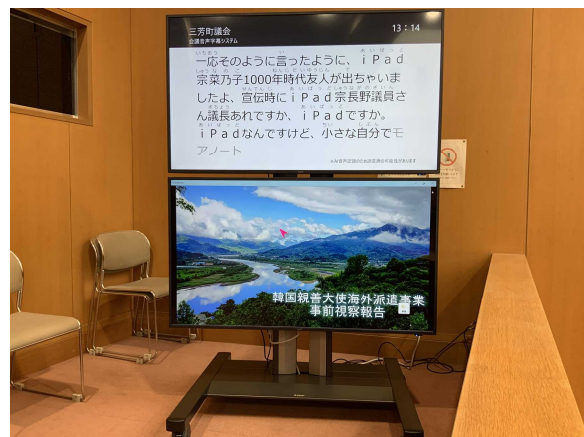
議会のライブ配信は、まさに同町議会の汗と涙の結晶である。かつて通年議会とし夜間や休日も開会したが、傍聴者は増えなかった。平日昼間だから見られないのではない。その気づきが、住民の生活の側へ議会を届けるライブ配信へと結実した。試行錯誤を恐れぬチャレンジ精神と志の高さ、そして「待っているだけではいけない」という広聴の姿勢に強い刺激を受けた。

議会だよりを活動報告で終わらせず、読んだ市民が傍聴や配信視聴へ動き、議会に声を届け、まちの課題を自分ごととする。そのような行動変容を起こす紙面を目指し、委員会活動に活かしていきたい。

4 写真



三芳町議会の方々と



傍聴人へ議員資料掲載及びアミボイス
を利用した同時文字起こし

株式会社 会議録センター 『「議会だより」研修』

視察日 令和8年5月28日（木）

1 研修の概要

本研修は、講師がさくら市議会だよりの課題を丁寧にヒアリングして構成する「セミオーダー型カリキュラム」である。一律のプログラムではなく、さくら市議会だよりの状況に最適化した解決策をダイレクトに提案。さらに現役編集者がさくら市議会だよりの誌面を全ページチェックし、具体的アドバイスをフィードバックします。議員からの「誌面をより良くしたい」という声に応え、理論だけでなく即戦力の「リメイク例」も提示。学んだその日から誌面に反映でき、次回紙面のブラッシュアップを図る。

2 視察内容

専門的視点による紙面診断等を受け、次号発行分から議会と市民をつなぐ「さくら市 議会だより」のブラッシュアップを図ることを目的に研修を受講する。特に以下の項目について学ぶ。

- ・ 専門家の紙面診断による客観的評価
- ・ 改善ポイントの具体的提示
- ・ 見出し改善のテクニック
- ・ 伝わる文章の再構成方法
- ・ ビジュアル（写真・図表）の効果的活用
- ・ 効率的な業務の進め方
- ・ 次号編集に直結する実践的助言

3 所感

最も目から鱗だったのは、議員と住民とでは情報量が10倍以上違い、見えている景色そのものが異なるという指摘である。議案書や委員会審査、現地調査などを通して議員には見えているまちの課題が、住民からは見えていない。議会だよりとは議会活動の報告にとどまらず、この景色の差を埋め、住民に課題を共有し、一緒に考えてもらうための媒体なのだという捉え直しは、「伝える責任」の重みを大きく変えるものだった。報告であれば、掲載すれば役目は果たせるが、景色の共有が目的であるならば、伝わらなければギャップは残されたままになる。また、議会だよりは住民が取りに行かなくても全戸に届くプッシュ型の媒体であり、議会のことが分かるほぼ唯一の入り口であるという指摘にも、この媒体の持つ可能性と責任をあらためて認識させられた。

研修では、さくら市議会だよりの実際の紙面について、委員全員が同じ場で専門

家の診断を受けた。余白や色づかい、定型レイアウト、質問への回答を追い続ける
継続報告の姿勢などが評価された一方、読者の目線は写真、見出し、本文の順に動
くこと、キャプションは写真の説明ではなく本文への引き込み役であること、見出
しは読者がどう受け止め次の行動につながるかを考えて付けることなど、紙面の入
り口の磨き方について多くの気づきを得た。「本文に書いてあるから説明は不要」と
いう発想ではなく、写真の訴求力と見出しの引き込みこそが読者との最初の接点で
あるという視点は、次号の編集からすぐにでも実践すべきものである。

4 写真



会議録センターで指導している
市町の議会だより表紙



対話型で実施した研修